

子育て支援活動の質的向上をめざして（２）

～循環性のある支援活動～

坂 鏡 子
(知多市児童センター)

白 石 淑 江
(同朋大学・子どもの虐待防止ネットワーク・あいち)

はじめに

第一報では、「子育てフェスタ」を研修の場として充実発展させるために、実行委員や分科会参加者を対象としたアンケート調査を実施し、支援活動の場で直面している問題について分析した。

その結果、子育て支援に関する研修機会はまだ少ないこと。支援活動の質を高める研修としては、活動を支える人材の確保を含めた子育て支援ネットワークの広がりや、親支援の方法論を深める企画の必要性について考察した。

本報では、子育て支援ネットワークを広げるために、活動を支える人材の確保・養成し、活動のよさを次の世代に継続・循環させていくという視点に着目し、各々の子育て支援の場に生じている問題や、活動を継続・循環するためのさまざまな工夫や課題について分析をする。また、それらの結果を通して、「子育てフェスタ in あいち」の取り組みを継続・循環させていくための課題についても考察を加える。

研究の目的・方法

1. 実行委員を対象にしたアンケート調査の分析

調査期日：対象：第一報を参照

調査項目：「活動を継続していく、次の世代に循環させていくための工夫・課題」
(自由記述)

2. 第2分科会の意見提案及び討議内容の分析

テーマ：「循環性のある子育て支援活動を目指して～次の世代へと活動をつないでいくために～」

意見提案者：

- (1)公的機関の立場から（〇市老人児童センター）
- (2)児童センターと市民活動の協働立場から
(C市子育て支援ふれあい・ねっと)
- (3)社会福祉協議会と市民活動の協働の立場から
(T市託児ボランティアつくしんぼう)
- (4)NPO活動団体の立場から

(子どもの虐待防止ネットワーク・あいち)

参加者：41名

(子育て当事者、子育て支援ボランティア、
大学教員、保健師、保育士)

研究の結果

1. 子育て支援活動の継続・循環性をはばむ問題点

(1)自立した交流活動の運営と役員やリーダーの育成の問題

多くの子育てサークルなどの交流活動は、会員相互の交流を深めるため、自主的運営の形態をとっている。しかし、活動には参加したいが、次期役員やリーダーになり手がなくて、自立した活動を継続していくことが難しい現状がある。

(2)親支援と子ども支援の関係性の問題

公的機関では、少ない職員体制の中で、市民と協働しなければ、充実した活動が展開できない。

しかし、子どもの健全育成を考えた場合、子どもと接するボランティアは誰でもいいとは言えないところがある。

また、託児ボランティア活動の場面でも、時間に余裕なく子どもを預け、泣き続ける子どもの姿等を見ると、親への支援が、子どもの立場にたった支援になっているか疑問が生じるという声が多く聞かれる。

(3)家庭内の諸事情や人間関係の摩擦による継続の困難性の問題

ボランティア活動に参画しているのは圧倒的に女性が多い実態がある。仕事や介護など、家族内における課題や、人間関係の中の摩擦や衝突によって活動の継続が難しくなることも少なくない。

また、無償の活動が多く、経済的な事情により、子どもの手が離れると仕事を始める人も多く、活動の継続が難しい。

2. 支援活動を継続・循環させていくための工夫と課題

(1)気軽に参加できる交流や、新しい人が支援活に入りやすい雰囲気づくり

子育て中の親が、交流の機会に参加しても、すでに仲間ができており、更に孤立感を強める場合も少なくない。また、若い世代は、組織に縛られることに抵抗感をもつ実態も多いため、入り口を広くし、子育て中の誰でもが気軽に入りやすい雰囲気づくりに心がける。

(2)利用者と支援者の「思い」を共有する姿勢を持つ。

支援者の「思い」のおしきせにならないよう、共有することから始め、お互いが歩み寄る姿勢を持つ。

その為、教えたり、命令されたりするのではなく、共感したり、ヒントを与えたりするような姿勢を大切にする。

(3)一人ひとりの負担を少なくし、楽しい活動を協力して創造し、社会貢献していることに自信をもつ。

一人ひとりの「やりたい」気持ちを大切に、みんなで協力して、楽しい活動を達成する。

活動の目的をはっきりさせ、内容は欲張らないで、その達成感から自信につなげ、社会の一員として貢献しているという自信や実感がもてるようにする。

(4)支援をされた人が次は支援者に育っていく意識を育てる。

自分がいろんな人に支えてもらったという意識をもつことが、次は自分が支援する側になるという「先輩ママ」という意識を育てていく。そうした「次の世代につなぐ」という循環性を、活動を通して自然に育むという意識を、支援者自身がもちあわせていることが大切である。

(5)活動の良さや意義を見出し、お互いの成長について確認しあう機会を創出する。

年度当初の計画案作成時や一年のまとめ、定例会などを通して、それぞれの活動の良さや意義について、会員間で確認をしあう。

また、支援活動や役員・リーダーをすることを通して、①人とかかわりが広がり、仲間への所属感や信頼関係が築けた、②今まで見えなかったことが見える、気づける等、視野を広がった。

こうした自分の成長を感じ、仲間にも認められエンパワーできる、「もうかった」という意識が実感できる機会を創出する。

(6)対等に意見交換をし、メンバー間の役割意識を芽生えさせる。

対等平等に意見交換ができる雰囲気を大切にしたい運営会議などを開催する。運営する側とトップダウンと会員からのボトムアップの間の温度差を縮めることで、メンバー一人ひとりの役割意識を育てるようにする。

(7)研修機会の充実を図り、活動意欲を高めよう。

研修会や勉強会、カンファレンス、養成講座等を開催し、子どもの立場にたった支援活動の意義や意味を確認し合うことにより、対応力を養成し、相互に支えあい活動の継続の意欲を高める。

3. 「子育てフェスタ in あいち」を継続・循環させるための今後の課題

(1)子育て支援活動の自主的研修の場としての充実

「子育てフェスタ」の意義の一つに、子育て支援に関わる行政、民間機関や市民が、職種や立場を超えて情報交流できることがあげられる。そこで、各々の実践を報告しあい、活動の意義を確認したり、今後の課題を探る等、研修の場として内容を充実させていく。

今後は、さらにより幅広い情報の共有化を図ることで、潜在化するニーズや、各活動の特性や関連性等、支援活動の多角・多面的理解を広げたり、子どもの支援につながる親支援の方法論を深めあっていく。

この取り組みを、継続・発展させるにより、子育て支援活動を顕在化させ、社会的認知の促進につながる事が考えられる。

(2)地域に密着した子育て支援ネットワークづくりの推進

多くの参加者が指摘するような、「必要な人に必要な支援が届けられる仕組み」の創っていくには、より身近な地域のつながりの中で、子育て活動を支える人材を確保・養成すること。既存の社会資源を有効活用し、さまざまな立場の役割や機能をつなぎあい、より具体性のある支援活動を充実させていく必要がある。

今後は、「多地域・同時発信型」の開催についても検討を加え、地域に密着した「顔の見えるネットワーク」を育てながら、具体性のある子育て支援ネットワークづくりの推進を目指したい。